

Title	「ダレカ+名詞句」について
Sub Title	A propos de dareka+NP en japonais
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.169(126)- 185(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ダレカ+名詞句」について^(*)

川 口 順 二

0. 緒 言

本稿は筆者が数年前から始めた仏語「quelque (単数)+名詞句(以下 NP と略す)」と日本語「ナニカ「ダレカ」「ドコカ...+NP」⁽¹⁾との対照研究のうちの、日本語「ダレカ...+NP」についての調査をまとめたものである。

対照研究の目的及び方法についてはここでは述べない。特に日本語のみを扱うからである。⁽²⁾

研究の最終目的は「quelque+NP」と「ナニカ「ダレカ」「ドコカ...+NP」を対照し、その背後にある発語操作の異同を記述することにあるが、その為にはまず各言語に於る夫々のマーカーが痕跡であるところの操作を見る必要がある。「ダレカ+NP」の観察はこの研究の一環である。

まずⅠで「ダレカ」の形能と機能について簡単な観察を行い、ついでⅡで資料の紹介と分類を行う。最後にⅢで「ダレカ+NP」の含む発話操作に言及して行く。

Ⅰ. 「ダレカ」の形態と機能

「ダレカ」は明らかにいわゆる疑問詞「ダレ」と、そしていわゆる助詞「カ」⁽³⁾の複合体である。「ダレカ」は「ナニカ」「ドコカ」「イツカ」「ナゼカ」

(*) この研究は1982年7月の三上文法研究会での発表をまとめて発展させたものである。寺村秀夫氏はじめ参加者諸氏から数多くの有益な御指摘をいただいた。又六鹿豊、小林康夫両氏にも日本語作例の許容性につきそのわずらわしきにも拘らず御意見をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

などと同様の構造を持ち、橋本(1981)はこれと平行した語構成が朝鮮語、満州語文語、モンゴル語、ロシア語、ネワリ語などに見られる事を指摘している。同論文は又モンゴル語ハルハ方言の *xen* (ダレ) -*č* (カ), *yamar* (ナニ) -*č* (カ) の -*č* が二人称代名詞 *či* に由来し、ロシア語の *kto* (ダレ) -*to* (カ), *čto* (ナニ) -*to* (カ) の -*to* が指示詞の *to* である事、仏語の *quelque* が「従属語句導入助詞」の *que* を含む事を指摘して、日本語の「ダレカ」等の「カ」と指示詞「カ」⁽⁴⁾との関係に言及している。

さて形能分析は興味深い事実を示してはくれるが、そのみでは背後にある操作を決定できない。*kto-to* とダレカがいかに形態の類似性をもっている、露語は他の諸不定詞が存在していてそのうち *kto-to* はダレカが現れ得るコンテクストに必ず現れ得るとはいえないのである。⁽⁵⁾

三上(1972)は「ダレカ」のタイプを不定詞と呼び一我々もこの用語を踏襲する—これと数詞との類似性を指摘している。

- (1) 甲. 同ジ本ヲ二冊買ッタ (two copies)
 乙. 二冊同ジ本ヲ買ッタ (two copies)
 丙. 二冊 (ノ本) ヲ一ショニ包ンデモラッタ (the two copies)
- (2) 甲. 手ノアイテル奴ヲ誰カ呼ンデキテクレ
 乙. 誰カ手ノアイテル奴ヲ呼ンデキテクレ
 丙. 給仕ガ誰カラ連レテ来マシタヨ

三上は(1)と(2)の類似性に基き、

- (3) 受付ニ誰カ来テキマスヨ

の「誰カ」を主格の「誰カガ」と同一視せずむしろ

- (3') 受付ニ誰カ若イ人ガ来テイマスヨ

の「名詞不足」と見なす (p. 351)。つまり格助詞がつけば definite という特性が附与されるという点に注目し、(3)は indefinite であるから名詞句省略のタイプと考えたわけである。併し乍らこの考え方はまず第一に数詞—つまり基数+分類詞(量詞)—と名詞の間の位置関係による解釈の相違がはつきりしない事、次の数詞のステータスが明確にとらえられていない事⁽⁶⁾などの為その妥当性をすぐには認めにくいと思われる。いずれにせよ⁽⁷⁾

(4) a. 誰カガ来ルダロウ

b. 誰カ来ルダロウ

の a 文と b 文の差異を即座に決定するのは困難に思われる。

次に疑問文の意味分析ではよく前提の概念が持ち出される事について考えよう。例えば

(5) ダレガ来タノ？

は前提として

(6) 誰カガ来タ

を持つ、という分析である。本論文では疑問文は直接考察の対象としないので問題指摘に止めておくが⁽⁸⁾、(5)に対する答として

(7) 誰モ来ナカッタヨ

が可能である為、前提の概念は問題を否定の問題に還元してしまう危険が伴う事を考えなければならない。

以上簡単に「ダレカ」の形態と機能について言及した。以下は問題を「ダレカ+NP」に絞る。

II. データの分類—モダリティを中心として—

II. 1. 表記について

記述を簡略にする為に次の様な表記を設定する。

(8) $\begin{array}{ccccccc} < & X & < & Y & r_0 & N & > & Z & r_1 & > \\ s_1 & & s_0 & & & s_0 & & & & & s_1 \\ & \underbrace{\hspace{10em}} & & & & & & & & & \end{array}$

X, Y, Z: 任意の要素

r_0, r_1 : 述語

N: 名詞

s_0 : 連体修飾を含む(含みうる)名詞句

s_1 : 一つの文

例えば

- (9) 毎日毎日, [誰か, 私を [...] 連れ出してくれる人] を, 待って(9)
たんですわ (辻『風塵』 p. 104)

では, 「毎日毎日」を X_1 , 文中に現れない「待っていた」の主語「私」を X_2 , 文中の「私」を Y_1 , 「連れ出す」を r_0 , 「人」を N , 「待つ」を r_1 と置く。この表記では「ダレカ」及び助詞, 助動詞, 補助動詞などを捨象しているが, これらの要素は(8)に加えられる諸操作の痕跡として現れると考えるからである。但し読み易くする為純粹に形式的な表記をとらず, 文と形式の中間的な表記を用いていく事とし, 厳密性は追求しないでおく。

(9)では「誰か, 私を [...] 連れ出してくれる人」が「ダレカ+NP」に該当する部分であり, この部分が s_0 に当る。 s_0 が挿入されている一つ上の段階の文を s_1 と呼ぶ。この章では s_0 と s_1 をモダリティを中心に検討して行く。

II. 2. s_1 のモダリティ

(a) 疑問

- (10) [どなたか岸井さんの外出前に, 訊ねてみえた方⁽¹⁰⁾] がいらっしやいましたか? (松本『ほそ道』上. p. 181)
- (11) [誰か電気関係の人] を知らないかと頼まれたので紹介状を書きましたが [...] (丸谷『笹まくら』 p. 201)

(b) 伝聞, 推量, 推論

- (12) オッさん, [たれか女] と会ってた そうじゃないか (井上靖『海峡』 p. 73)
- (13) それが [誰か偉い人] からの電話らしいことは態度で判った (丸谷『笹まくら』 p. 93)
- (14) だから, おれは, 男の言うように, [誰か日本人の依頼人] がいることはわかるが [...] (辻『天草』 p. 143)

(c) 義務, 必然

- (15) とにかく, 理屈を言うならば, [誰か男] が護衛の役を果さなければいけないわね (高木『追跡』 p. 398)
- (16) 桂は支度しながら, [たれか荷物を持って貰う人物] が必要なこと

に気付いた（井上靖『城砦』p. 104）

(d) 条件節

- (17) もちろん 党员の中に「誰か内通者」がいなければ、そういう芝居のきっかけはつかめますまいが...（高木『追跡』p. 344）

(e) 選言 (disjunction)

- (18) 合理主義者の目には、ただの偶然と見えるような出来事でも、それが連続してくるときは、もう偶然ではない。「誰か、人間」の意志が働いているか、それとも天意があらわれているのだというのが、根本的な彼の人生観の一つだった（高木『追跡』p. 237）

この例は「のだ」が用いられており、(b)の推論とも考えられる。一般に選言はこのタイプのモダリティと共起するので分類項として立てなくとも良い。

(f) 命令、勧誘

- (19) それでは「だれかお前のかわり、大将五人」の名をあげよ（宮沢『北将軍』p. 25）

- (20) 懐中電燈で仔細に点検して「こりゃ、ひどいじゃないか。そこにおる連中のうち「誰か頭だった者」、ちょっとここに来う」と土工たちに呼びかけると [...]（井伏『多甚古村』p. 121）

この二つの例は共に命令文だが、(19)では「ダレカ+NP」は対話者ではなく、(20)ではそうになっている。(20)のタイプはここでは扱わない⁽¹¹⁾。

- (g) morpheme として現れるのみでなく単に動詞の語彙自体が含むモダリティがある。いわゆる「意志」は「動能」(conation) とかかわってくる。

- (21) はっきりいって迪子はその時、「誰か優しく慰めてくれる人」を求めていた（渡辺『野わけ』p. 24）
- (22) どんなことがあっても、かならずねばって「誰かひとり、監督」に逢うつもりであった（太宰『正義と微笑』p. 56）
- (23) そこで八百八名の乗客のなかから「だれかひとり主役」を選び出したいと思うが [...]（井上『吉里吉里人』p. 9）

(h) 確定 (certain)

(a)~(g)までのモダリティを通しての特徴はこれが $\langle X \ s_0 \ Z \ r_1 \rangle$ という述定関係 (relation prédictive⁽¹²⁾) にかかり、これを確定 (certain) として提起しない、つまり非確定 (non certain) であるという点である。これに対し確定の例がいくつかある。

(24) はあ、あの拘摸かなんかがまぎれこんでいたらしいんですね。

「どなたかお客様」が拘摸だとおさげびになつたので、わっとみなさんが総立ちになって... (横溝『三つ首』p. 126)

(25) 「誰かお客」が女中をからかっている。女中が笑いながら何か言い返した (丸谷『笹まくら』p. 89)

(26) 堀川健太郎が、「誰か愛想のいい年寄り」につかまり、じつに退屈そうな顔で相槌を打っていたが、とつぜん熱心な目つきでぼくの方を見た (丸谷『反乱』p. 395)

(27) でも君も知ってる通り、「誰か俺を憎んでいるやつ」が卑劣な手紙をばらまいているので、大変だよ (黒岩『踊』p. 284)

以上 s_1 のモダリティを中心にデータを分類してみた。いくつかの例文で明らかと思うが s_1 に二つ以上のモダリティがかかわる事もあり、分類はあく迄便宜的性質のものである。データに基く考察はⅢで行うが、その前に今度は s_0 のモダリティを問題にする。

Ⅱ. 3. s_0 のモダリティ

s_0 については、 s_0 内の構造が述語 r_0 を含むか—例えば「ダレカ私ヲココラ連レ出シテクレル人」—又は否か—例えば「誰カ男」—の二種類が考えられる。後者の場合Ⅳの語彙的特性が大きく問題となる。

Ⅱ. 3. 1. s_0 に r_0 が現れる場合

(a) 「...スルヨウナ、スルコトガデキル、スル意志ノアル」とパラフレーズ出きるもの

(28) 「おい、一丁やらねえか」と義一が花札を巧みに切りながら呼びかける [...] 「おい、[誰かやる者] はねえのか」と義一は唆す (山本『さぶ』p. 248-9)

- (29) 「むかし、婚約の出来ていたお方はあったんです、三福商会という会社の社長さんで一百合ちゃんがその秘書をしておられたとき [...] その後はそんな人、いなかったろうと思いますわ」 [...] 「それでは『誰か、その人のいうことだったら何でもきくという、先生なり知人なり』はいませんでしたか？」(高木『人形』p. 71)
- (b) 「... = 見エル, ... ヨウダ」でパラフレーズ出きるもの
- (30) [だれかご主人に怨みを含んでいたような人間]の心当りはありませんか」(森村『花』p. 60)
- (31) 左右の閉じた扉のかけて『誰か刺客のよう_な人々』がこちらを窺っているような気がした(加賀『フランドル』p. 396-7)
- (32) うしろの方で[だれかとしよりらしい人]の、いま目がさめたというふうで、はきはきしている声がありました(宮沢『銀河鉄道』p. 287)
- (c) 次に s_0 の r_0 がアスペクト的に状態を表すものを、特に主体間関係(relation intersubjective)のモダリティとの関連から取りあげる。この主体間関係とは、発話主体, (énonciateur), 発言者(locuteur)及び発話文中の主体(subjet de l'énoncé)の関係の問題であり、いわゆる伝統的に一, 二, 三人称と呼ばれる人称関係をも含む。ここでは「評価」(appréciation)のモダリティの例をまずあげる。
- (33) いいあんばいに裏口の外に[だれか怪しい男]がたたずんでいたという、近所の人の証言があったんだ(構溝『三つ首』p. 173)
- (34) あるいは[だれか大切な人]にもらったお守りとしてもってきたのかしれない(森村『白の十字架』p. 496)
- (35) あなたは、私と離れているあいだ、[誰か好きな方]がいらしらんじゃない?(辻『北の岬』p. 56)

次に「知識、理解」に関する例を挙げる。

- (36) [誰かぼくらの知_って_いる_人]だったのかい?(辻『風越峠』p. 300)
- (37) [誰か見_おぼ_えの_ある_男]が、にやにやしなが(客だろうか?そ

れともバーテン?) 千円札を一枚渡して、ぜひタクシーで帰れと言い [...] 通りへ出て車をとめてくれた (丸谷『笹まくら』 p. 232)

- (38) 《不愉快なことは先へのばしたがいい。[誰か気心の知れた 第三者] がいたほうが楽だ》と思った (加賀『フランドル』 p. 303)

主体間関係のモダリティ (modalité intersubjective) については III. 2. でとりあげる。

II. 3. 2. s_0 に r_0 が現れない場合

この範疇に属するタイプの処理は複雑である。⁽¹³⁾ここでは問題を一つに絞る。次の例を見てみよう。

- (39) 「ミモザ館って、[たれか知ってる人] が始めたんですか」

中谷が聞くと、

「マダムを知ってるんだ [...]」(井上靖『海峡』 p. 25)

- (40) その白山号の列車の中では、[どなたか知り合いの方] とお会いになりましたか? (松本『ほそ道』 下 p. 200)

- (41) 頬ひげが顔を偽るように、衣服が体を偽る。覆うものがあるても見抜かれるのに、裸では (もし [誰か浜田庄吉の知人] がこの和歌山にいれば) 一たまりもないと恐れたのである (丸谷『笹まくら』 p. 163)

「ダレカ+NP」の NP に当る部分に注目すると、これは II. 3. 1. の(c)で扱った「知識、理解」にかかわるもので、その点から見れば (39)-(41) は共通している。すなわち $\langle x, y, \text{知ル} \rangle$ という述定関係を出発点で持っていて、「 $y \text{ ハ } x \text{ ノ知人デアル}$ 」, 「 $y \text{ ハ } x \text{ ノ知リアイデアル}$ 」, 「 $x \text{ ハ } y \text{ ヲ知ッテイル}$ 」などの形が派生されるのである。

「ダレカ+N」の N はこのように述定関係を背後に持ちそれに基いてある集合を作るタイプの他に、N 自身が個体についてそれが N の示す概念に属するか否かを問題にするような分類機能を主とするものがある。例えば、

- (42) ねえ、寺田さん。主人には [だれか女の人]、ついていなかった?

(松本『棲息』上 p. 62)

がそれで、これは

(43) [だれか連れ]があったの？(横構『三つ首』p. 129)

のような述定関係から派生した N と比べると、次のように考えられる。
〈x ハ y ト共ニイル〉というタイプの関係を想定すると、〈x ハ y ノ連レ
デアル〉という表現が派生されるが、そこから「連レ」という N が構築で
きる。それに対し最初関係をそのまま表現してしまうと例えば〈x ガ y
ニツイテイル〉が作られる。いずれにしろ、x は y に定位 (repéré)⁽¹⁴⁾ され
るわけだが、表現の構築の段階では異なっている。

II. 4. データ分類についてのまとめ

以上実際に拾ってきた例を s_1 , s_0 のモダリティを中心に分類して来た。
言語研究に於る分類作業はそれ自身が目的とはならない、という考えに立
っている為、決してここで行った分類が最良のものとは思っていない。む
しろ大切なのは現実にとどの様な例にぶつかり、又どの様な問題を示唆して
いるかを提示することであろう。ここでは確定 (certain) と非確定 (non
certain) のモダリティ、主体間関係のモダリティの二種類が記述を通して
浮びあがってきた。残るスペースは「ダレカ+NP」の背後にある操作を
探る為に費す。コーパスには出て来なかったタイプの問題も提起して行き
たいと思う。

III. ダレカ操作について

ダレカ操作は s_0 の N にかかわるだけでなく、 s_1 全体に影響する事は
II で見た通りである。今単に

(44) a. 太郎ハ拘摸ニ金ヲスラレタ

b. 太郎ハ [ダレカ拘摸] ニ金ヲスラレタ

の二文を比べると、(44 a) は (i)「前ニ問題ニシタソノ拘摸」という解釈
と、(ii)単に「金ヲスラレタ、ソシテスッタ人ハスリニ決ッテイルガ、ソレ
ハ特ニ問題ニシナイ」という解釈の二様が少なくとも可能であろう。つま
り(ii)では「金ヲスラレタ」とだけ云っても同値の解釈である。それに対し⁽¹⁵⁾

(44 b) は (i) (ii) の解釈は不可能である。その点「ダレカ拘摸」は「アル拘摸」と対比して考えるべきである。我々は「ダレカ+NP」に於て「ダレカ」がある種の NP に対する限定操作の痕跡であり、又その操作が r_1 に影響を及ぼすようなタイプであると想定せざるを得ない。

そこで提起される問題は、(i) NP に対するダレカ操作の性質は何か？
(ii) r_1 にかかわるようなモダリティとダレカ操作はどの様に関連するか？
の二つとなる。紙数の関係からここでは(i)を主に扱う。

Ⅲ. 1. NP にかかわるダレカによる限定操作

次の例を見てみよう。

(45) ? 太郎ハ昨日三田デ [誰カ乞食] ニ会ッタ

この例はこのままでは不自然である。それに対し

(46) ? 太郎ハ昨日三田デ [誰カ女優] ニ会ッタ

は許容度がより高くなる。そこで

(H1) 「ダレカ+N」の挿入されている s_1 が確定 (certain) に属する時、
N の持つ語彙的特性が文の許容度に影響する。N は内包的にある概念域 (domaine notionnel) を形成するがその域に属する集合 E について、(a) その時少なくともある元 i は述定関係 p を満足させるが、他の元と元 i との区別は p を満足しないかするかという違いによってなされる、(b) 然し乍ら E に関してはそれに属する元が (数量化操作により) 個別化されており、そして元 i は (a) に述べたもの以上の限定を受け得る、(c) N が社会文化的背景に依って (b) と矛盾しない性質の時、「X ハダレカ N ニ会ッタ」のタイプの文は許容度が増す。

と置くと問題になるのは、(a) がどのような形で記述されるか、(b) で (a) 以上の限定と云った時のその性質、そして (c) が実際にどのような N を指すか、という三点である。

(a) と (b) は同時に扱う事が出来る。今

(47) 太郎ハ昨日三田デ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. アル} \\ \text{b. ? ダレカ} \end{array} \right\}$ 女優ニ会ッタ

をとると、(a)、(b) の条件が満足されている。しかも両者共、

(48) (a) デモ (会ッタノハ確カニ女優ダガ) ソレガ誰ダカ良ク知ラナイ
判ラナインダ

(b) デモソレガ誰カハ君ニハ云イタクナインダ

の様なコンテキストと共に起出きる。但、「アル」は (48) のコンテキストを必要とせず、従って背後の操作が異なっていると考えられる。すなわち (H1b) の条件はコンテキストで明示的に満たされることを必要とするのである。

このことから

(49) 太郎ハ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ?アル} \\ \text{b. ダレカ} \end{array} \right\}$ 女優ニデモ車ヲ買ッテモラッタ $\dot{\text{ン}}\dot{\text{ダ}}\dot{\text{ロ}}\dot{\text{ウ}}$

(50) 太郎モ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ?アル} \\ \text{b. ダレカ} \end{array} \right\}$ 他ノ女優ニ頼ンデミタ $\dot{\text{ラ}}\dot{\text{良}}\dot{\text{イ}}\dot{\text{ノ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ナ}}$

のようにモーダルなコンテキスト内で元 i が述定関係を満足させるというような確定の性質が抜けていると「アル」が不自然になってくる事が説明される。(49) では「誰カ知ラスガ例エバ女優」, (50) では「誰デモ良イカラ誰カ他ノ女優」という解釈だが、確定の場合でも、

(51) 太郎ハ昨日三田デ $\dot{\text{ナ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{シ}}\dot{\text{ロ}}$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. アル} \\ \text{b. ダレカ} \end{array} \right\}$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{女優} \\ \text{乞食} \end{array} \right\}$ ニ会ッタ

のように「ナニシロ」の導入が「ダレカ+N」の許容度を増す。(51b) の解釈の一つは「i カ j k カ、イズレニセヨダレカ女優」ということで、この選言的要素 (...カ...カ) が文を許容させると考えられる。従って、

(H2) 「ダレカ+N」が挿入されている s_i が確定に属する時、その N の属す集合 E が語彙的にその元の個別化を示唆し易い程文の許容性が増す。その場合選言操作を示唆し易くなるからである。⁽¹⁶⁾

さて「乞食」の語彙的性格から来るダレカ操作との相性の悪さを集合 E の性格に求めたが、今 (24) を再びとりあげ一下に (52a) として少し変えて繰り返す—考えてみる。

(52) a. ダレカ客ガ拘摸ダト呼ンダ

b. ?ダレカ乞食ガ警察ダト呼ンダ

「客」はいわゆる「関係名詞」(nom relationnel) であり、必ず「ドコノ」という場所限定が伴う。従って (52a) と (52b) の許容度の違いが N の指す集合についての仮説を裏づける。所で (45) はアスペクトマーカー「テイ

タ」を導入すると、

(53) 太郎ハ昨日三田デ誰カ乞食ニ会ッテイタ

となり許容性は問題なく良くなる。アスペクトの問題にここでは深く立ち入れないが、

(54) 太郎ガ三田デダレカ乞食ニ会ッタノハ昨日ダ

のようにタ形でも許容される文が得られる事にも注目したい。又(45)を展開させて

(55) 太郎ハ昨日三田デ誰カ乞食ニ会ッテ、長イ事話ヲシタ

としても許容度がずっと高まる。従って「ダレカ+N」を含む s_1 は文脈中の他の文と何らかの関係を持たねばならないように見える。これは談話構造の観点からとらえるべき問題であろう。

(H3) 「ダレカ+N」が挿入されている s_1 が確定の時、(a) N の属する集合が語彙的又は文脈的に限定されているか (b) s_1 は文脈中他の文と談話構造的な関係を有する。

文中での集合の構築の痕跡として「別ノ」「他ノ」「一人(ノ)」などがある。「別ノ」「他ノ」では

(56) a. *太郎ハ昨日誰カ花子ト会ッタ

b. 太郎ハ昨日誰カ別ノ花子ニ会ッタ

で明かなように、N が半承応の一つまり同一の特性を持ちつつ別個の個体一であり、「別ノ」「他ノ」が選言操作を可能にする 添加操作 (opération d'addition) の痕跡である。これは又「モウ一人ノ」でも表される。⁽¹⁷⁾ 又副詞として「又今度モ」などは r_1 自体が繰り返されるわけだが N はその度に同一の可能性がある。

(57) 太郎ハ $\left\{ \begin{array}{l} \text{又} \\ \text{今度モ} \end{array} \right\}$ ダレカ乞食ニ会ッタ

アスペクト的に見て反復は

(58) 太郎ハ当時毎日ソノ道デダレカ乞食ニ会ッタ

のようにダレカと共に起る。

以上Nについての限定操作のいくつかを見てきた。諸例を通して観察された事は、ダレカ操作の根本に選言を許容させる集合の構築がある事であ

る。選言は明示的に文脈中に現れることもある。

(59) = (37) 「誰か見おぼえのある男」が「...」(客だろうか？それともバ
ーテン？)「...」

又「コトニ「例エバ」のように元の一つを特にとりあげるのも共通の操作
を基盤とする。

(60) こういう変化も、「誰か女性」の、ことに妹などの感化によるもの
ではないか、と泉一郎は思っていた (高木『追跡』p. 117)

Ⅲ. 2. ダレカ操作とモダリティ

選言操作は狭い意味で「iカ又ハ j ノイズレカ」を結果として生み出す
が、Ⅲ.1. で見た選言は数個の全く無関係な元について i カ j カを選択す
るというより、むしろ「i デアルカ 又ハ i ニ類似シツツモ異ナル j」とい
うタイプと考えられる。Culioli の提唱する走査 (parcours) という操作は
Nの限定にかかわると同時に述語のモダリティとも関係する。

(61) 太郎ハ昨日三田デ誰カ乞食ニ会ッタランイ／会ッタソウダ／会ッ
タヨウダ／会ッタ筈ダ／会ッタニ違イナイ／会ッタノダ／会ッタ
ノダロウ？⁽¹⁸⁾

このタイプの特徴は発話者 (énonciateur) が〈太郎、乞食、会ウ〉という
関係の断定を行う発言者 (locuteur) と同定されていないということで、こ
れは

(62) 太郎ハ昨日三田デ誰カ乞食ニ会ッタト云ッテイル
でも観察される。

夫々のモダリティについてここで詳述出さない。そこで一つだけ主体間
関係のモダリティ⁽¹⁹⁾を取りあげる。

(63) ? 太郎ハ昨日「誰カ知ッテイル乞食」ニ会ッタ

(64) 太郎ハ昨日「誰カ見タコトモナイ乞食」ニ会ッタ

(65) ? 私ハ昨日「誰カ知ッテイル乞食」ニ会ッタ

(66) 私ハ昨日「誰カ見タコトモナイ乞食」ニ会ッタ

(63)は「伝聞」の解釈をとる為にはコンテクストを作るかマーカーを(62)
の様に加える必要がある。「知っている」主体が太郎と考えられるが、こ

の発話文中の主体が発話者と同定される発言者と異なっていると、文が不自然になる。(65)は三種の主体が同定されているが、結果として「シカシ名前ヲ忘レテシマッタ」とか「シカシ君ニソレガ誰ダカ云エナイ」などのコンテキストが必要になる。

(64), (66)は「誰カ自分トハ関係ナイ乞食」という意味で、この場合文は許容される。

IV. 結 論

「ダレカ+NP」は限定及びモダリティの操作と考えられる。「ナニカ」「ドコカ」の問題を明らかにしないうちに結論は出しにくい、現時点では選言一より正確には走査 (parcours) の操作がダレカ操作の中心にあると思われる。なお「太郎カ誰カ」のタイプと「昨日来タ誰カ」のタイプには言及出来なかったが、上と同じ操作が中心となっていると考えて良からう。(H3 ii) で述べた談話構造的な段階での拘束は未だに明確に規定出きしていない。今後の考察の対象として行きたい。紙数の関係で扱い切れなかった問題の数も多いがそれは又稿を改めて論ずる予定である。

注

- (1) 「quelque+NP」については Culioli が精密な研究を行っている。又筆者はこれを援用しつつ1981年にデータを集めてフランス語学会例会で発表した。その要約は『フランス語学研究』XVI, 1982にある。
- (2) 対照研究の理論的考察については Culioli (1979), 国広編 (1980-2), 川端他編 (1982, 特に寺村の論文), 又研究例としては Launey (1977), Launey (1981), Funch & Léonard (1979), Paris (1981), Kawaguchi (à paraître) など参照のこと。又1982年9月には日仏学術シンポジウムが東京で開催されたが、日仏語対照研究の部門が設けられており興味深い発表と議論の場になった。筆者はそこで「ダレカ+NP」の問題をこことは少し異なったアングルから考察した。
- (3) 歴史的の問題については、阪倉篤義「文法史について一疑問表現の変遷を一例として」『国語と国文学』1960年10月、『文章と表現』角川, 1975年に再録を参照。
- (4) 上代語の「カ」系指示詞については橋本四郎「指示詞の史的展開」, 川端他編『講座日本語学』2, 『文法史』所収参照。

- (5) このことは Paillard (1980) を見れば明らかである。
- (6) 「数詞+ノ+名詞」と「名詞+ノ」の関係については 何回か 議論の対象になっている。Kuno “Theoretical perspectives in Japanese linguistics” in Hinds, J. Howard, I. (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitaku-sha 1978 参照。又「ダレカ+助詞/0」については会津(1980) 参照。
- (7) 分類詞の日本語での発話的研究は余り進んでいないようである。中国語については Paris (1981) 参照。
- (8) Kawaguchi (1979), (1980) 参照。現在筆者はダレカの問題をダレモの考察と平行して行って初めてダレの特性をより明らかに出来るだろうと予測している。
- (9) 出典の表示については参考文献の項参照。
- (10) 例文ではダレカを含め s_0 に当る部分を [] で括弧にすることにする。
- (11) 泉邦寿氏は、「ダレカココニ来イ」や「ダレカ、助ケテ!」などの文は仏語などで *quelqu'un* と訳せない事を指摘なさった。氏の御言うようにこの問題はプラグマティクスの観点から見ても興味深いと思われる。「ダレカ」相当表現がこの用法を持つ言語が他にあるかどうかは未だに調べていない。
- (12) 述定関係については Culioli (1982) 参照。なお Culioli 言語理論の用語についてその日本語訳は、上論文の和訳が青木、小熊両氏により作られているものを踏襲する。
- (13) 表層に於る分布から打ちたてられる分類としての品詞わけ 以前の問題として、概念 (notion) の段階での諸操作の記述については、Culioli (1975), Léonard (1980) の Annexe, Paris (1981) などを参照。
- (14) 定位 (repérage) については Culioli (1982) 参照。
- (15) いわゆる同族目的語 (cognate object) の問題を参照されたい。橋本 (1981) は p.53 sq. でこの問題を中国語の「ダレカナニカ」等と関係させて論じている。日本語では「アウ」という述語が関係をうちたてるオペレーターとして注目される。「スリニアウ」、「ドロボーニアウ」などは「事故ニアウ」「不幸ニアウ」などと平行して考えるべきで、仏語の *trouver, connaître* の用法の一部はコトと関係する時類似した値をもつ。cf. *Trois personnes ont trouvé la mort dans cet accident.*
- (16) Culioli の *quelque+N* についての仮説は *occurrence non nulle mais parcours sur propriétés* である。すなわち述定関係が成立するが、それを満足させる項が質的に一義的に決定されず、コレカアレカアレカのように質的に走査 (*parcours*) という操作の対象となる。
- (17) 英語の *else* の使用上の強い拘束を考え合わせると興味深い。
- (18) これらのモダリティについては寺村 (1979) 及び (1980) 参照。

(19) Paillard (1980) p. 169-174 参照。

[文 献]

コーパスとしたテキストについては丸谷オ一『たった一人の反乱』講談社1971年と井上ひさし『吉里吉里人』新潮社1981年を除いてはすべて文庫又は新書本である。題名はしばしば一部分だけを示したが見出すのは容易と思う。ここでは研究書名のみをあげる。

会津 洋(1980)「『誰カ来マシタカ』と『誰カガ来マシタカ』との意味上の差異について」、『人文社会科学研究』、早稲田大学理工学部、一般教育人文科学研究会。

川端善明他編(1982)『講座日本語学』第10巻、外国語との対照 I. 明治書院

国広哲弥編(1980-82)『日英語比較講座』全5巻

寺村秀夫(1979)「ムードの形式と意味(1)一概言的報道の表現一」、『文芸言語研究. 言語篇』IV.

id. (1980)「ムードの形式と意味(2)一事態説明の表現一」、『同上』V.

橋本萬太郎(1981)『現代博言学』、大修館

三上 章(1972)『現代語法序説』、くろしお出版(再版)

Culioli, A. (1975) "Notes sur 'détermination' et 'quantification': définition des opérations d'extraction et de fléchage", *PITFALL*, Paris VII.

id. (1979) "Conditions d'utilisation des données issues de plusieurs langues naturelles", *Modèles linguistiques* I, 1.

id. (1982) "Rôle des représentations métalinguistiques en syntaxe", communication au XIIIe Congrès International des Linguistes, in *Preprints of the plenary session papers*, The XIIIth International Congress of Linguists, Editorial Committee, Tokyo.

id. (à paraître): "A propos de *quelque*".

Fuchs, C. & Léonard, A.-M. (1979) *Vers une théorie des aspects. Les systèmes du français et de l'anglais*, Mouton, Paris, La Hape, New York.

Kawaguchi, J. (1979) "Intonation, interrogation et la particule *-ka* en japonais", *CLAO*, V.

id. (1980) "Interrogation et personne en japonais", *Mélanges Valin*.

id. (à paraître) "Un grammairien japonais du XVIIIe siècle et la linguistique japonaise", *Langages*.

id. (à paraître) "A propos de *dareka*+NP", *Actes du colloque scientifique franco-japonais*, tenu à Tokyo en septembre 1982.

Launey, M. (1977) "Le pluriel transcatégoriel/-ke'/en nahuatl: contribution à l'étude de la relation «être»/«avoir»". *Amerindia*, II.

- id. (1979) "Une interprétation linguistique des schémas relationnels: passifs-impersonnels et causatifs en nahuatl classique", *Amerindia*, VI.
- Léonard, A.-M. (1980) "A propos de quelques indéfinis en anglais", in *Opérations de détermination. Théorie et description*, I. DRL, LLF, Paris VII.
- Paillard, D. (1980) "A propos de quelques indéfinis en russe", *id.*
- Paris, M.-Cl. (1981) *Problèmes de syntaxe et de sémantique en linguistique chinoise*, Collège de France, Institut des hautes études chinoises.